農技セ第７５４３号
平成３０年１２月２１日

各関係機関長　　殿
病害虫防除員　　殿

徳島県立農林水産総合技術支援センター
病害虫防除所長
（公印省略）

平成３０年度農作物病害虫発生予察情報について

平成３０年度農作物病害虫発生予報第１２号を発表したので送付します。

平成３０年度農作物病害虫発生予報第１２号

平成３０年１２月２１日
徳　　島　　県

Ⅰ.野菜

冬春トマト

疫病

1)予報内容

発生量　　平年並(前年より少ない)で,発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月第４半旬の巡回調査では,発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が16.0%,発病度が1.0)。

(2)12月20日発表の１か月予報では,気温は高く,降水量及び日照時間はほぼ平年並で,期間のはじめは気温がかなり高く,その後は気温が低くなる時期があり,期間の前半は気温の変動が大きいと予想されており,やや発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

(1)窒素質肥料を過用すると茎葉が軟弱となり発生しやすくなるので,肥培管理に注意する。

(2)多湿環境は発病を著しく助長するので,施設内が過湿にならないよう十分に換気を行う。

(3)罹病葉は伝染源になるので,できるだけ早く摘み取って,ハウス外で処分する。

(4)病原菌は気孔から侵入するので,薬剤散布は気孔の多い葉の裏側を重点的に行う。特に,下葉には丁寧に散布する。

(5)病原菌が侵入してからごく短期間で発病するので,発生を認めたら散布間隔を短縮して,集中的に薬剤散布を行う。

灰色かび病

1)予報内容

発生量　　平年より多く(前年より多い),発生程度は「少～中」

2)予報の根拠

(1)12月第４半旬の巡回調査では,発生圃場率が20.0%,発病葉率が 1.8%と,平年(1.4%, 0.0)に比べて高い。なお,発病果実は認めていない。

(2)12月20日発表の１か月予報では,気温は高く,降水量及び日照時間はほぼ平年並で,期間のはじめは気温がかなり高く,その後は気温が低くなる時期があり,期間の前半は気温の変動が大きいと予想されており,やや発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

(1)気温が20℃位で多湿の時に発生しやすいので,施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には,暖房機のファンを作動させて,ハウス内の多湿化を防止する。

(2)発病果や花弁などは伝染源になるので,できるだけ早く除去し,ハウス外で処分する。

(3)耐性菌出現の恐れがあるので,同一系統の薬剤の連用は避ける。

(4)薬剤は,ゲッター水和剤,スミブレンド水和剤,セイビアーフロアブル20,ファンタジスタ顆粒水和剤,ピクシオDFなどを散布する。

葉かび病

1)予報内容

発生量　　平年より少なく(前年並),発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月第４半旬の巡回調査では,発生を認めていない（平年同時期は発生圃場率が8.5%,発病度が0.6)。

(2)12月20日発表の１か月予報では,気温は高く,降水量及び日照時間はほぼ平年並で,期間のはじめは気温がかなり高く,その後は気温が低くなる時期があり,期間の前半は気温の変動が大きいと予想されており,やや発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

(1)施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には,暖房機のファンを作動させて,ハウス内の多湿化を防止する。

(2)罹病葉は伝染源になるので,できるだけ早く摘み取って,ハウス外で処分する。

(3)病斑は主に葉裏に形成されるので,薬液は葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。

(4)耐性菌出現の恐れがあるので,同一系統の薬剤の連用は避ける。

コナジラミ類(タバココナジラミ,オンシツコナジラミ)

1)予報内容

発生量　　平年よりやや多く(前年並),発生程度は「中」

2)予報の根拠

(1)12月第４半旬の巡回調査では,発生圃場率が70.0%と,平年(40.9%)に比べて高いが,寄生葉率は 3.3%と,平年(2.1%)並の発生である。

(2)12月20日発表の１か月予報では,気温は高く,降水量及び日照時間はほぼ平年並で,期間のはじめは気温がかなり高く,その後は気温が低くなる時期があり,期間の前半は気温の変動が大きいと予想されており,発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので,初期防除に努める。コナジラミ類は葉裏に寄生するので,薬液は葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。

(2)ネオニコチノイド系剤の一部(ジノテフラン以外の剤),及び合成ピレスロイド系剤に対する感受性

が低いことが報告されているバイオタイプＱに対しては,クリアザールフロアブル(マルハナバチ影響日数：１日),コルト顆粒水和剤(３～７日),トランスフォームフロアブル(２日),粘着くん液剤(０日),オレート液剤(１日)等の剤が有効である。

(3)薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので,同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春ナス

うどんこ病

1)予報内容

発生量　　平年並(前年よりやや少ない)で,発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月第４半旬の巡回調査では,発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が15.0%,発病葉率が0.9%)。

(2)12月20日発表の１か月予報では,気温は高く,降水量及び日照時間はほぼ平年並で,期間のはじめは気温がかなり高く,その後は気温が低くなる時期があり,期間の前半は気温の変動が大きいと予想されており,発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

(1)発生が多くなってからでは防除が困難になるので,初期防除に努める。

(2)罹病葉は早期に圃場外に持ち出し,病原菌密度の低下に努める。

(3)耐性菌出現の恐れがあるので,同一系統薬剤の連用は避ける。

すすかび病

1)予報内容

発生量　　平年よりやや少なく(前年並),発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月第４半旬の巡回調査では,発生圃場率が14.3%と,平年(29.8%)に比べてやや低く,発病葉率も0.4%と,平年(2.6%)に比べて低い。

(2)12月20日発表の１か月予報では,気温は高く,降水量及び日照時間はほぼ平年並で,期間のはじめは気温がかなり高く,その後は気温が低くなる時期があり,期間の前半は気温の変動が大きいと予想されており,やや発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

(1)気温が25℃位で多湿の時に発生しやすいので,施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には,暖房機のファンを作動させて,ハウス内の多湿化を防止する。また,潅水過多にならないよう注意する。

(2)罹病葉は伝染源になるので,できるだけ早く摘み取って,ハウス外で処分する。

(3)多発すると防除が困難になるので,初期防除に努める。

(4)耐性菌出現の恐れがあるので,同一系統薬剤の連用は避ける。なお,本県ではSDHI剤のボスカリド剤及びペンチオピラド剤で耐性菌が確認されている。

灰色かび病

1)予報内容

発生量　　平年より多く(前年より多い),発生程度は「少～中」

2)予報の根拠

(1)12月第４半旬の巡回調査では,発生圃場率が28.6%,発病果率が 0.3%と,平年(0%, 0%)に比べて高い。
(2)12月20日発表の１か月予報では,気温は高く,降水量及び日照時間はほぼ平年並で,期間のはじめは気温がかなり高く,その後は気温が低くなる時期があり,期間の前半は気温の変動が大きいと予想されており,やや発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

(1)気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすい。特に湿度の影響が大きいので,施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には,暖房機のファンを作動させて,ハウス内の多湿化を防止する。また,潅水過多にならないよう注意する。
(2)朝夕の急激な冷え込みは発生を著しく助長するので,適切な温度管理に努める。
(3)発病果や花弁などは伝染源になるので,できるだけ早く除去し,ハウス外で処分する。
(4)多発すると防除が困難になるので,初期防除に努める。
(5)耐性菌出現の恐れがあるので,同一系統の薬剤の連用は避ける。
(6)薬剤は,ゲッター水和剤,スミブレンド水和剤,ショウチノスケフロアブル,セイビアーフロアブル20,ファンタジスタ顆粒水和剤,ピクシオDFなどを散布する。

アブラムシ類

1)予報内容

発生量　　平年並(前年並)で,発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月第４半旬の巡回調査では,発生を認めていない(平年同時期も発生なし)。
(2)12月20日発表の１か月予報では,気温は高く,降水量及び日照時間はほぼ平年並で,期間のはじめは気温がかなり高く,その後は気温が低くなる時期があり,期間の前半は気温の変動が大きいと予想されており,発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので,初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので,薬液は葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。
(2)薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので,同一系統の薬剤の連用は避ける。

コナジラミ類(主に,タバココナジラミ)

1)予報内容

発生量　　平年よりやや多く(前年より多い),発生程度は「中」

2)予報の根拠

(1)12月第４半旬の巡回調査では,発生圃場率が57.1%と,平年(44.8%)並の発生であるが,寄生葉率は6.6%と,平年(2.2%)に比べて高い。
(2)12月20日発表の１か月予報では,気温は高く,降水量及び日照時間はほぼ平年並で,期間のはじめは気温がかなり高く,その後は気温が低くなる時期があり,期間の前半は気温の変動が大きいと予想されており,発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので,初期防除に努める。コナジラミ類は葉裏に寄生するので,薬液は葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。
(2)薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので,同一系統の薬剤の連用は避ける。

ハダニ類

1)予報内容

発生量　　平年並(前年並)で,発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月第４半旬の巡回調査では,発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が 3.1%,寄生葉率が 0.03%)。

(2)12月20日発表の１か月予報では,気温は高く,降水量及び日照時間はほぼ平年並で,期間のはじめは気温がかなり高く,その後は気温が低くなる時期があり,期間の前半は気温の変動が大きいと予想されており,発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので,初期防除に努める。ハダニ類はほとんど葉裏に寄生しているので,薬液は葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。

アザミウマ類

1)予報内容

発生量　　平年並(前年並)で,発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月第４半旬の巡回調査では,発生圃場率が71.4%,寄生葉率が 8.7%と,平年(58.8%, 8.7%)並の発生である。また,被害果実発生圃場率は14.3%,被害果率は 0.3%と,平年(25.5%, 0.7%)に比べてやや低い。

(2)12月20日発表の１か月予報では,気温は高く,降水量及び日照時間はほぼ平年並で,期間のはじめは気温がかなり高く,その後は気温が低くなる時期があり,期間の前半は気温の変動が大きいと予想されており,発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので,初期防除に努める。なお,ミナミキイロアザミウマはほとんど葉裏に寄生しているので,薬液が葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。

(2)薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので,同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春キュウリ

うどんこ病

1)予報内容

発生量　　平年並(前年並)で,発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月第４半旬の巡回調査では,発生圃場率が55.6%と,平年(59.8%)並の発生であるが,発病葉率は1.7%と,平年(6.1%)に比べて低い。

(2)12月20日発表の１か月予報では,気温は高く,降水量及び日照時間はほぼ平年並で,期間のはじめは気温がかなり高く,その後は気温が低くなる時期があり,期間の前半は気温の変動が大きいと予想されており,発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

(1)発生が多くなってからでは防除が困難になるので,初期防除に努める。

(2)罹病葉は圃場外に持ち出し,病原菌密度の低下に努める。

(3)同一系統薬剤の連用は耐性菌出現の恐れがあるので避ける。

灰色かび病

1)予報内容

発生量　　平年並(前年並)で,発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月第４半旬の巡回調査では,発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が 1.7%,発病果率が 0.4%)。

(2)12月20日発表の１か月予報では,気温は高く,降水量及び日照時間はほぼ平年並で,期間のはじめは気温がかなり高く,その後は気温が低くなる時期があり,期間の前半は気温の変動が大きいと予想されており,やや発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

(1)気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすい。特に湿度の影響が大きいので,施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には,暖房機のファンを作動させて,ハウス内の多湿化を防止する。また,潅水過多にならないよう注意する。

(2)朝夕の急激な冷え込みは発生を著しく助長するので,適切な温度管理に努める。

(3)発病果や花弁などは伝染源になるので,できるだけ早く除去し,ハウス外で処分する。

(4)多発すると防除が困難になるので,初期防除に努める。

(5)耐性菌出現の恐れがあるので,同一系統の薬剤の連用は避ける。

べと病

1)予報内容

発生量　　平年並(前年並)で,発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月第４半旬の巡回調査では,発生圃場率が11.1%と,平年(32.1%)に比べてやや低いが,発病葉率は3.9%と,平年(2.2%)並の発生である。

(2)12月20日発表の１か月予報では,気温は高く,降水量及び日照時間はほぼ平年並で,期間のはじめは気温がかなり高く,その後は気温が低くなる時期があり,期間の前半は気温の変動が大きいと予想されており,やや発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

(1)施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には,暖房機のファンを作動させて,ハウス内の多湿化を防止する。また,潅水過多にならないよう注意する。

(2)肥料切れや着果過多などで樹勢が衰えた場合に激発するので,肥培管理に注意する。

(3)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤散布は,葉の裏側を重点的に行う。

(4)耐性菌出現の恐れがあるので,同一系統の薬剤の連用は避ける。

褐斑病

1)予報内容

発生量　　平年よりやや多く(前年より多い),発生程度は「少～中」

2)予報の根拠

(1)12月第４半旬の巡回調査では,発生圃場率が22.2%,発病葉率が 1.2%と,平年(12.7%, 0.2%)に比べてやや高い。

(2)12月20日発表の１か月予報では,気温は高く,降水量及び日照時間はほぼ平年並で,期間のはじめは気温がかなり高く,その後は気温が低くなる時期があり,期間の前半は気温の変動が大きいと予想さ

れており,やや発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

(1)施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続く等,十分な換気ができない場合には,暖房機のファンを作動させて,ハウス内の多湿化を防止する。

(2)肥料切れや窒素過多などは発病を助長するので,肥培管理に注意する。

(3)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤散布は,葉の裏側を重点的に行う。

(4)耐性菌出現の恐れがあるので,同一系統の薬剤の連用は避ける。なお,本県では,アゾキシストロビン剤,ボスカリド剤,ジエトフェンカルブ・プロシミドン剤に対する耐性菌が確認されている。

アブラナ科野菜

黒腐病

1)予報内容

発生量　　平年並(前年並)で,発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月第４半旬のキャベツ,ブロッコリー,カリフラワーの巡回調査では,発生圃場率が50.0%と,平年(29.4%)に比べてやや高いが,発病度は 1.0と,平年(2.1)並の発生である。

(2)12月20日発表の１か月予報では,気温は高く,降水量及び日照時間はほぼ平年並で,期間のはじめは気温がかなり高く,その後は気温が低くなる時期があり,期間の前半は気温の変動が大きいと予想されており,やや発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

(1)発生初期,または降雨前後の防除に努める。

(2)害虫による食害痕も病原菌の侵入口となるので,害虫の防除も行う。

(3)被害株をそのまま放置しておくと,次期作の伝染源となるので,圃場外に持ち出し適切に処分する。

アブラムシ類

1)予報内容

発生量　　平年並(前年より多い)で,発生程度は「少～中」

2)予報の根拠

(1)12月第４半旬のキャベツ,ブロッコリー,カリフラワーの巡回調査では,発生圃場率が50.0%,寄生株率が 9.1%と,平年(56.8%,12.0%)並の発生である。

(2)12月20日発表の１か月予報では,気温は高く,降水量及び日照時間はほぼ平年並で,期間のはじめは気温がかなり高く,その後は気温が低くなる時期があり,期間の前半は気温の変動が大きいと予想されており,発生助長的な気象条件である。

予想されており,発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

コナガ

1)予報内容

発生量　　平年並(前年並)で,発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月第４半旬のキャベツ,ブロッコリー,カリフラワーの巡回調査では,発生圃場率が30.0%,10株当

たりの幼虫及び蛹数が 0.1頭と,平年(20.7%, 0.4頭)並の発生である。

(2)12月20日発表の１か月予報では,気温は高く,降水量及び日照時間はほぼ平年並で,期間のはじめは気温がかなり高く,その後は気温が低くなる時期があり,期間の前半は気温の変動が大きいと予想されており,発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。葉裏に生息しているので,薬剤散布は葉の裏側を重点的に行う。

(2)薬剤抵抗性獲得の恐れがあるので,同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬レタス

灰色かび病

1)予報内容

発生量　　平年より多く(前年より多い),発生程度は「少～中」

2)予報の根拠

(1)12月第４半旬の巡回調査では,発生圃場率が23.1%,発病株率が 0.5%と,平年(0.8%, 0.0%)に比べて高い。

(2)12月20日発表の１か月予報では,気温は高く,降水量及び日照時間はほぼ平年並で,期間のはじめは気温がかなり高く,その後は気温が低くなる時期があり,期間の前半は気温の変動が大きいと予想されており,やや発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

(1)圃場の排水をよくする。また,トンネル内が過湿にならないように換気を図る。

(2)収穫期には株元が繁茂して過湿となるので,発生しやすい。

(3)発病株は伝染源になるので,できるだけ早く除去する。

(4)耐性菌出現の恐れがあるので,同一系統の薬剤の連用は避ける。

菌核病

1)予報内容

発生量　　平年より多く(前年より多い),発生程度は「少～中」

2)予報の根拠

(1)12月第４半旬の巡回調査では,発生圃場率が76.9%,発病株率が 2.2%と,平年(8.7%, 0.3%)に比べて高い。

(2)12月20日発表の１か月予報では,気温は高く,降水量及び日照時間はほぼ平年並で,期間のはじめは気温がかなり高く,その後は気温が低くなる時期があり,期間の前半は気温の変動が大きいと予想されており,やや発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

(1)トンネル内が過湿にならないように換気を図る。

(2)発病株を放置しておくと多数の菌核を形成して伝染源になるので,できるだけ早く処分する。

(3)耐性菌出現の恐れがあるので,同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1)予報内容

発生量　　平年よりやや少なく(前年並),発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月第４半旬の巡回調査では,発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が15.2%,寄生株率が0.7%)。

(2)12月20日発表の１か月予報では,気温は高く,降水量及び日照時間はほぼ平年並で,期間のはじめは気温がかなり高く,その後は気温が低くなる時期があり,期間の前半は気温の変動が大きいと予想されており,発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難となるので,初期防除に努める。

冬春ホウレンソウ

べと病

1)予報内容

発生量　　平年並(前年並)で,発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月第４半旬の巡回調査では発生を認めていない(平年同時期も未発生)。

(2)12月20日発表の１か月予報では,気温は高く,降水量及び日照時間はほぼ平年並で,期間のはじめは気温がかなり高く,その後は気温が低くなる時期があり,期間の前半は気温の変動が大きいと予想されており,やや発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

(1)県内では,べと病菌レース13による発病が確認されているので,レース13以上に抵抗性を持つ品種を利用する。作型等の関係で作付けできない場合には,薬剤による防除を徹底する。

(2)平均気温が８～18℃で曇雨天が続くと,多発しやすい。発生が多くなると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤は予防的に,また下葉や葉裏にもよくかかるよう丁寧に散布する。

(3)病原菌は被害株についたまま越冬し,春になると分生胞子を形成して伝染源となる。春先の発生を抑制するために,薬剤を予防的に散布して再発を防止する。

(4)葉が繁茂して軟弱になると被害が多いので,肥培管理に注意する。

アブラムシ類

1)予報内容

発生量　　平年よりやや少なく(前年並),発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月第４半旬の巡回調査では,発生圃場率が 9.1%,１株当たりの寄生虫数が 0.0頭と,平年(38.6%,0.3頭)に比べてやや低い。

(2)12月20日発表の１か月予報では,気温は高く,降水量及び日照時間はほぼ平年並で,期間のはじめは気温がかなり高く,その後は気温が低くなる時期があり,期間の前半は気温の変動が大きいと予想されており,発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難となるので,初期防除に努める。

冬春イチゴ

うどんこ病

1)予報内容

発生量　　平年並(前年並)で,発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月第４半旬の巡回調査では,発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が 0.7%,発病葉率が 0.1%)。

(2)12月20日発表の１か月予報では,気温は高く,降水量及び日照時間はほぼ平年並で,期間のはじめは気温がかなり高く,その後は気温が低くなる時期があり,期間の前半は気温の変動が大きいと予想されており,発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

(1)発生が多くなってからでは防除が困難になるので初期防除に努める。

(2)古葉を早めに除去し,葉裏に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

(3)罹病した果実や茎葉などは見つけ次第圃場外に持ち出し,病原菌密度の低下に努める。

(4)耐性菌出現の恐れがあるので,同一系統の薬剤の連用は避ける。

灰色かび病

1)予報内容

発生量　　平年並～やや多く(前年よりやや多い),発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月第４半旬の巡回調査では,発生圃場率が 7.1%,発病果率が 0.1%と,平年(2.1%, 0.1%)並の発生である。

(2)12月20日発表の１か月予報では,気温は高く,降水量及び日照時間はほぼ平年並で,期間のはじめは気温がかなり高く,その後は気温が低くなる時期があり,期間の前半は気温の変動が大きいと予想されており,やや発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

(1)気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすいので,施設内が過湿にならないよう換気を図る。

(2)発病果は伝染源になるので,速やかに圃場から持ち出し処分する。

(3)耐性菌出現の恐れがあるので,同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1)予報内容

発生量　　平年並(前年並)で,発生程度は「少～中」

2)予報の根拠

(1)12月第４半旬の巡回調査では,発生圃場率が35.7%,寄生株率が 4.6%と,平年(30.0%, 5.0%)並の発生である。

(2)12月20日発表の１か月予報では,気温は高く,降水量及び日照時間はほぼ平年並で,期間のはじめは気温がかなり高く,その後は気温が低くなる時期があり,期間の前半は気温の変動が大きいと予想されており,発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので,初期防除に努める。

ハダニ類

1)予報内容

発生量　　平年並(前年よりやや多い)で,発生程度は「中」

2)予報の根拠

(1)12月第４半旬の巡回調査では,発生圃場率が57.1%,寄生葉率が 5.5%と,平年(54.3%, 6.6%)並の発生である。

(2)12月20日発表の１か月予報では,気温は高く,降水量及び日照時間はほぼ平年並で,期間のはじめは気温がかなり高く,その後は気温が低くなる時期があり,期間の前半は気温の変動が大きいと予想されており,発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので,初期防除に努める。

(2)薬剤抵抗性獲得の恐れがあるので,同一系統の薬剤の連用は避ける。

Ⅱ.その他

○　ハウスやトンネル等で密閉保温していると,内部が多湿となり,病害の発生に適した条件となるため,晴天時の日中には換気を十分行うとともに,夜間は暖房機の温度を高めに設定して施設内の湿度低下を図ること。

○　薬剤の使用に当たっては,必ず農薬ラベルの記載事項を遵守すること。

発生量の表示

発生程度：甚＞多＞中＞少＞無

発 生 量：多い＞やや多い＞並＞やや少ない＞少ない

徳 島 県 立 農 林 水 産 総 合 技 術 支 援 セ ン タ ー 病 害 虫 防 除 所

ＵＲＬ　：*https://www.pref.tokushima.lg.jp/tafftsc/t-boujosho/*

○　病害虫の発生予察情報,発生状況,防除法等をお知らせしています。